

粗野のすすめ

上村 菊朗



★ 現代っ子の弱点

現代っ子の最大の弱点は、身体に比べ、体力のないことです。形態のうえからは、身長、体重のわりに胸囲が貧弱です。肥

満児もふえています。この傾向は都会児にとくに目立ちます。

運動機能としては、柔軟性や瞬発力がとくに劣っています。

これでは機敏な身のこなしは望めません。

精神機能は体力の重要な因子です。最近、幼稚園児のなかにも、意欲に乏しい無気力児がふえているといわれます。自主性に乏しく、忍耐力に欠ける子どもが多いようです。大きな身体を考えると忍耐力に欠けるといったほうがよいかもしれません。何かむずかしい問題にぶつかると、まわれ右して、教師や親の手助けを求めるのが今の幼児です。口でいい争っても、身体をぶつつけあうけんかはほとんどみられなくなったとのこと。

このままでいいものでしょうか。これでは、整理され、お膳立された社会の中で、自分中心に生きてゆくほかはありません。現代っ子の将来の幸福を考えると、「粗野のすすめ」という主題はいよいよ切実なものに思えます。

★ 粗野に背をむける社会

この無気力さに対し、子どもをせめることはできません。人育児という言葉があります。親が自分の考え通りに子どもを育てあげようとする現代の育児をいましめて遠城寺先生が名付けられたものです。これでは、子ども本来の活発さ、野性はおさえられてしまいます。児童文学者である滑川先生は、現代の武者人形のかわいらしい顔におどろき、そのなかに、もはや鬼退治のできない、衰退した都会的な子ども像のあることを指摘しています。健康で心意のたくましい「子ども像」は今いづく

というわけで、現代の小児科医に対しても反省を求められています。

私もこれに同感です。核家族がふえ、家庭の中で、兄弟同志きたえあう機会は少なくなりました。保育園、幼稚園の普及で、小さな子どもは庭先にでも遊んでくれる相手さえないのが現状です。

たまたま相手がみつかったても、その遊びは完全に親の監視下におかれます。物理的に制限され、精神的に制約されるのですから、自主性の乏しい、類型人間がはやばやとつくられるのはやむを得ないことといってよいでしょう。

あまりにも子ども中心の育児を提唱し批判を受けているスボック博士でさえ、日本の育児を「世界中一番の甘やかし」ときめつけています。

子どもたちにとって、時代を問わず求められるイメージは、ひ弱な美しさではなく、ほん放なたくましさだと思えます。早と野性を失い、無気力になる現代っ子の弱点の背後に、現代社会の弱点をまず認め、反省しなくてはなりません。

★ 現代に許される粗野

現代の幼児の持つ弱点を防ぐために、まず考えられることは、子どもは子どもらしくという自然さを尊重する育児です。過保

護に対し、粗野という言葉を使ってもいいでしょう。ただ、言葉として理解し、自然の意見、粗野の育児をすすめてみても、かけ声だけになりかねません。この意味で、現代に許される粗野についてまず考えてみましょう。

根本的には、現代の社会の持つ価値観、両親の持つ世界観、育児観が問題です。その中心は出世主義です。子どものうちにそのルールにのせるためには、子どもらしさをあつさりとききらめるといった態度が目にあまります。これが決して子どもの将来の幸福を約束するものではないはずで、この意味で、社会と両親のもつ偏向した価値観に対し、現場からの強い主張が第一に望まれます。

次に、実際の粗野のすすめに入らなければなりません。この言葉はあくまで、主題を強調するためのものと考えます。家畜を野に離してみても戸惑うばかりで、最後には息ぎれしてしまいます。

現代の幼児にとって、粗野、すなわち野性の世界はあまりにもかけ離れています。この意味で現代に許される粗野は、段階をおってすすめられる制限された粗野といわざるを得ません。

第一段階が価値観の修正であることはすでにのべました。このことは第一歩でありながら、一番困難なことです。ときには、実行の段階で理解してもらわなくてはなりません。

第二の段階は、子どもらしさに対する制約をできるだけとりに除くことです。

私たちにとって、窮屈な衣服、冬の長ズボン、長靴下は大変気になります。よこれ一つない遊び着ほど意味のないものはありません。よこれを気にして、砂遊び、水遊びさえできない子どもたちをまず解放したいものです。

子どものけんかから干渉するおとなが多くなりました。男の子にとって、身体でぶつつかりあうけんかは、子どもらしさの象徴です。けんかを通し、社会性が発達します。けんかに勝っても、まけても子どもなりの反省があるはずで、その段階でじょうずに指導したいものです。

おとなの考えでつくり出したルールや制約から、できるだけ子どもを自由にしてください。そこに子どもの世界のルールが生まれます。

次の段階は、いよいよ粗野のすすめです。相手は子どもですから、年齢にふさわしい限界は必要です。限界の設定には、遊び場の不足、交通事故の危険性、公害など現代社会のいろいろな制約の加わることはやむを得ません。それだけに、この範囲なら自由に振舞っていいという場所と機会を積極的につくり出すことです。

脱都会といわれますが、保育環境として、今後真剣に考慮す

べき課題だと思います。どんなに工夫してみても、幼稚園の庭ではせますぎますから、年間の保育計画に思いきってもりこみたいものです。

一定の範囲で自由に遊ばせる場合、危険がない限り干渉しないといった原則が必要です。いずれにしても、現代の社会で粗野をすすめる際には、いろいろな制限に直面することと思います。結果として、制限づきの粗野、計画された粗野になりかねません。ただ、それだけに粗野のすすめが重要なのです。

★ 医学的にみた粗野のすすめ

ワッペン流行ではありませんが、現在、レットルをはられた弱い子どもが多すぎます。しかも、そのレットルは、医師の診断と無関係につけられているようです。

年、五、六回熱のあるかぜをひいても、かぜをひきやすく困るとお母さん方は訴えます。幼児にとっては当り前のことです。

「かぜ」の原因として、夜、ふみはいだための寝冷えが極度に心配されます。ふみはぐくらは、むしろ身体の鍛練になると考えてほしいものです。そのくらいでかぜをひくこと自体が問題です。

健康なお子さんでこの状態ですから、吐きやすい、かぜをひ

くとゼーゼーといった体質的に過敏な子どもに対する過保護は目に余ります。秋口から厚着にし、夜、ちよつと咳がひどいと、翌日は幼稚園、学校を休ませるといった家庭が少なくありません。これではいつまでも体質的な過敏さから卒業できません。自主性、忍耐力も育ちません。

このように体質的に過敏なお子さんにとって、健康児以上に計画された粗野が必要でしょう。近年、ぜん息児のためのキャンプがあちこちで計画されています。日課には、山登り、水泳が組みこまれ、成功しています。北欧では、ぜんそく児の運動として、はげしいアイスホッケーをとりいれ、肺活量の増大、ぜん息状態の改善への効果が認められています。一見、乱暴のようですが、体質的に過敏なお子さんにこそ、子どもの自然さをとり戻してもらわなくてはなりません。

このほか、糖尿病や、先天性心臓病、てんかんなど慢性のハンディキャップを持ったお子さんについても同様です。最近では、頭ごなしに食物や運動を制限せず、許される幅を最大限にまでひろげる方針がとられています。心臓病のお子さんでも、許される範囲で、充分に活動させます。これによって、手術のあと、社会生活への適応が容易になります。このように、慢性のハンディキャップを持つ子どもに対しても、粗野のすすめは適用されつつあるといつてよいでしょう。

肥満児も、粗野をすすめた対象です。性格的にもおとなしく、活発さに欠けます。そのために、肥り、ますます食べるといった悪循環が多いようです。走ることは苦手でしょうから、自由に泳がせることから始めてください。得意なものから始め、徐々に子どもらしさをとり返してもらわなくてはなりません。

乗物に酔うお子さんがあります。酔ってもいいから、ビニールの袋でも持たせて乗せるといった親があります。粗野の一つといえますが、そのほうが乗物よいらからの卒業は早くなつていきます。

このように、医学的にも過保護よりは、自然育児、粗野のすすめの重要性は再認識されています。

★ むすび

粗野には多少の危険をとまいません。しかし、毒を以て毒を制するという言葉のように、粗野を通して得られた体力、耐性は力強さがあります。子どもはかぜをひきながら、自分の力で丈夫になります。倒れたり、ころんだりしながら事故への耐性が得られます。心の世界でも、体験を通して得られた自信が何よりの力になります。この意味で、計画された粗野を実行にうつす時代だと考えます。

(印刷局中央病院)